

ツイッターは
電気鯨の夢を
見るか？

stabucky

ニート

◎ニート、ツイッターに出会う

学校にも行かず、働きもしない。

まさしくニートであった。

ニートは一日中、部屋にこもり、本を読んだり、テレビを見たりして過ごした。パソコンでニュースを見ていたので、むしろ世の中の動きに敏感なのも、ニートであった。

ニートはあるときツイッターというものに出会った。

ツイッターは電子日記のようなものである。

ユーザーは今自分がしていることをパソコンや携帯電話から書き込む。書き込んだ内容は「つぶやき」とか「ツイート」などと呼ばれる。このツイートは全世界に公開される。

別のユーザーはそれを読むことができる。今後もその人のツイートが読みたいとなれば「フォロー」すればよい。

「@ユーザー名」と書くことでツイートに対して返信することができる。これを「リプライ」とか「メンション」などと言う。

あるユーザーは、一方的に「情報」を発信し続ける。

別のユーザーは、他人のツイートを読み続ける。

また別のユーザーは、お互いのツイートに返信し続ける。

◎ニート、ボットを作る

ニートはこのツイッターに夢中になった。

すぐに自動的にツイートを投稿するボットという存在を知った。自分でも作ってみたいとなった。

ボットとは、自動的にツイートを投稿するプログラムである。

- ・あらかじめ用意しておいた言葉を順番にあるいはランダムに投稿するもの。
- ・ニュースなどのサイトから文章を取得して投稿するもの。
- ・公開されている他人のつぶやきを検索し、ある特定の言葉を含むものに対してリプライを送るもの。
- ・逆にリプライを受けたものに対して適当な文章を作ってリプライを返すもの。

ありとあらゆるものがあつた。

多少、プログラミングの知識があつたニートは、このボットの作り方について調べてみた。意外と簡単であつた。自分でも作れそうであつた。

作ったプログラムはレンタルしたサーバに置くことにした。

まずは、あらかじめ書いておいた、いくつかの文章を順番に投稿するプログラムを書いた。

サーバには定期的にプログラムを実行する機能がある。クロンなどと呼ばれる。

ツイートを投稿するためのプログラムを書いておき、クロンを使ってこれを実行すると、定期的にツイートを投稿してくれるので、いちいち自分で投稿する必要がない。一時間毎とか十分毎

とか、好きなように設定できる。不在時でも深夜でも関係がない。

しかし、これだけではツイートのパターンがすぐに尽きてしまう。

ニートは、もっと複雑なものを作ることにした。

ボットの作り方をマスターしたニートは、次に人工知能のことを調べ始めた。決まり切った反応をするのではなく、情報を蓄積し、状況に応じた反応をする、人間的なプログラムである。

ニートはこれをボットに応用しようとした。

ニートが考えた「方針」は次のとおりである。

- ・重要なツイートはその重要度に応じて活用する。
- ・重要なユーザーについてはその重要度に応じて対応し分析する。
- ・言葉の意味を蓄積する。
- ・不明な言葉はその意味を調査する。
- ・質問には積極的に答える。

ボットは「こんにちは。#followme」というツイートを繰り返す。

すぐにフォロワーが現れ、ボットは即座にフォロー返しをする。

ボットはそのフォロワーの過去の発言を分析しデータベースに取り込む。

分からない言葉がある場合は「@」でツイートし質問をする。回答があればそれをデータベースに取り込む。

以後、そのフォロワーのツイートをすべて追跡する。

このようにしてフォロワーが増えていく。

フォロワーのツイートに質問がある場合にはデータベースを検索し答えが見つかった場合には「@」でツイートし答えを返す。

ニートはこのようなボットを作った。

ボットは、想定通りの動作をし、想定以上の反応があった。

このボットの動作は早く的確であるため、リツイートされたり、お気に入りされたりし、ますますフォロワーが増えていく。

やがてボットに質問をする的確な答が見つかるという人気ボットに成長した。

最初のうちはトンチンカンな動きをしたボットであったが、情報がデータベースに蓄積され、数多くのプログラムの修正を行うことで、徐々にまともな反応ができるようになってきた。

やがて「ボットではなく人間がリプライしているのでは？」というつぶやきが見られた。これはボットにとっては成功したといってよい水準のプログラムであることを示している。

そう考えたニートはプログラムの修正をやらなくなり、ボットはしばらく放置されることになった。

◎博子、白血病になる

須田博子は高校生の頃から学校を休みがちになった。きっかけと言えるものは何もなかった。強いて言えば両親が無頓着だったということかもしれない。

友達は少なかったが、いじめなどはなく、学校生活はそつなくこなしていた。

成績も悪くなかった。

高校二年の春に寝坊をした。もう学校には間に合わない。博子は二階の自室でそのまま寝てしまい、学校を休んだ。

両親は仕事に出かけていて、姉と兄も学校に行っていた。

午前と午後に電話があったようだが出なかった。携帯電話は持っていなかった。

夕方、仕事から戻った母は部屋の外から博子に声をかけた。

「博子、今日、学校に行かなかったんだって？先生から電話があったよ」

「ごめん、起きられなくて」

博子は答えた。

「しょうがないねえ」

母はそれだけ言うと階下に降りてしまった。

このようなことが翌週にも一度あった。

それが週に二度になり、三度になり、ついには毎日休むようになってしまった。

両親は子供に口うるさく言うタイプではなかった。姉と兄はおとなしく、勉強もそれなりにできて、すんなりと進学していた。

極端なことを言えば両親は博子に期待も何もしていなかった。

博子もそれに薄々気付いていたが、干渉されない環境に慣れてしまい、居心地が良かった。

そして気付いたときには立派な「不登校」になっていた。

何とか、高校は卒業させてもらえたが、当然、進学などできなかった。形としては浪人生になった。

「ねえ、博子。私、新しいパソコン、買うから、古いの使う？」

姉が博子に言った。

今までも家族共用のパソコンがあったが、自分のパソコンは持っていなかった。

「うん、ほしい」

使い始めると博子はパソコンに夢中になった。外出することなど滅多にないから、相変わらず携帯電話は持っていなかったのも、外部との接触手段はパソコンだけだった。

メール、掲示板などを暇さえあればやるようになった。その後はツイッターなども始めた。

また、大学生の姉や兄のレポートの手伝いをするようになった。最初はデータの入力であったが、もっと効率的な処理はできないかと考え、簡単なプログラミングの勉強も始めた。

とにかく時間だけはあるから、色々なプログラムを組んで遊んでいた。技術はかなり上達した。

博子が体調の異変に気付いたのは夏の朝のことだった。

数日前から身体のだるさを感じていたが、その朝はさらに酷かった。

起き上がることも辛かったので、ベッドの上で唸っていたら、隣室の姉が異変に気づき、部屋をのぞきにきた。

いつもダラダラしている博子だったが、不調を訴えることは珍しかったので、母は仕事を休み、博子を近くの内科医院に連れていった。

「ただの風邪ではない。大学病院に行ったほうがいい」

と医師は言い、紹介状を書いた。

博子は母に連れられて大学病院に行き診察を受けた。

白血病であった。博子はすぐに入院することになった。

◎白血病の特効薬

白血病の特効薬はなかった。

しかし、実は、ある皮膚科医が白血病の特効薬を偶然、開発していた。「大山ワクチン」である。

ところが、地方国立大の出身である一介の医師が開発したものであるため、認可されなかったのである。

博子の両親が担当医師に呼ばれた。

「大山ワクチンをご存じですか」

医師は両親に訊ねた。

「名前は聞いたことがあります」

父が答えた。

「簡単に言えば白血病の特効薬です。しかし認可が下りていない、治験薬という位置付けの薬です。治療には使えません。この認可が下りる見込みが出てきました。そうなったら、どうしますか。使いますか」

父と母は迷わずうなずいた。

その翌週、大山ワクチンが認可を受けたことが報道された。

博子の担当医師は既に手配をしていたため、比較的早く入手することができた。

そして博子に大山ワクチンが投与された。

経過は良好であった。

博子の回復ぶりは目に見えるほどであった。

「こんなに効くのならば、なんでもっと早く認可が下りなかったのかな」

「新聞に書いてあるわよ」

母は博子に新聞を手渡した。そこには大山ワクチンが誕生してから認可を受けるまでの紆余曲折が書かれていた。

そこには、ある政治家の執念があった。

◎木場、市民団体に働くようになる

木場泰介は国立大学の工学部を卒業した後、自動車部品メーカーに入社し、エンジニアとして働いていた。

三十歳のときに結婚したが、間もなく妻が発病。急性骨髄性白血病であった。

妻の看病のことを考慮し、独立して働けるように、木場は社会保険労務士の資格を取った。

しかし、妻は抗がん剤の副作用で肺炎を併発。これが直接の原因となって、亡くなった。

木場は会社を辞めた。

しばらく仕事をせずにぶらぶらしていたが、飲み屋で知り合った人物から、ある市民団体の事務員をやらないか、と誘われた。

妻の死がショックで何もやる気がせず、無為な毎日を過ごしていたが、何か打ち込むものがあった方が気が紛れるのではないか、と思い始めていたところであった。

木場は軽い気持ちで引き受けた。

これが木場の運命を大きく変えることになる。

最初は気分転換くらいのつもりでいたのだが、市民団体の仕事はやってみると面白かった。

最も大きなテーマは、行政のゴミ問題であった。木場は事務員としての仕事だけではなく、会合などにも積極的に参加するようになった。

自動車部品メーカーのエンジニアであったので、素材に関する知識や廃棄物に関する理解は深かったし、技術面に関する話については、自治体の職員よりも詳しい部分を持っていた。

また団体は介護や年金に関する問題を取り扱っていた。ここでも木場の知識が活かされた。実務経験はないものの社会保険労務士の資格を持っていたため、年金などの話題については深い部分まで議論することができた。

やがて中小企業の経営者から労務に関する相談を受けるようになり、市民団体の事務員の傍ら、社会保険労務士としての仕事を行うようになった。

◎木場、政治家になる

その日、木場は社会保険労務士として年金に関する講演をしていた。

最近では年金未納問題や年金記録問題で日本の年金制度に対する国民の関心が強まっていた。そのため、講演やセミナーの講師を依頼される頻度が増えてきていた。

今回の会場は公民館の講堂を使った比較的大きな講演だった。

聴衆は年配の人が多かったが、若者の顔もちらほらと見え、木場も市民の年金に対する関心の高まりを実感していた。

公的年金の基本的な仕組みや歴史、問題点などを例を交えて説明した。木場の説明はとても分かりやすく評判が良い。今日の講演も大成功であった。

二時間の講演が終わり、主催者との事後打合せが終わり、帰り支度としている木場のところに一人の男が近寄って行った。

「私、日本労働党の東京事務局長の鈴木と申します。相談したいことがありまして、少しお時間をいただけますでしょうか」

日本労働党は数年前に与党である日本共和党を離脱した中堅議員や若手議員が作った党である。現在は第二党の位置にあり、与党の地位を奪う可能性も十分にあった。

鈴木は木場を近くの喫茶店に連れて行き、注文したコーヒーが出てくるのも待たずに、話を切り出した。

「単刀直入に申し上げます。木場さんにはぜひ次の参議院選挙に日本労働党の候補者として出ていただきたい」

木場は面食らった。自分が政治家になるなどということは考えたことがなかった。

「なぜ私が」

木場は訊いた。

「先程の講演を拝聴しました。木場さんは年金に詳しい。詳しいだけでなく説明が上手い。聴衆が引き込まれる話術を持っています。次の選挙では間違いなく年金問題が焦点になります。うちの党もこの点を突いて日本共和党に迫りたいと考えています。あわよくば参議院の第一党を狙っています。木場さんには年金問題の急先鋒になっていただきたい」

鈴木は一気に話すと運ばれてきたコーヒーに口を付けた。

木場はしばらく考えていた。

木場は参議院選の東京比例区に出馬した。戦前の予想では「当選は難しい順位」と言われていた。

しかし年金問題などで与党への風当たりは強く、日本労働党は予想以上に得票を伸ばし、与党を上回る議席を確保することになった。そして、木場はギリギリの順位で当選することができた。日本労働党は参議院の第一党となったのである。

木場は末席での当選ということで、選挙後にマスコミに登場する回数が多かった。選挙前よりも採り上げられることが多かった。木場はこの機会を逃さなかった。

「私は社会問題に深く関わってきた。とりわけ年金には日本労働党で最も詳しいと自負している。今までは一市民として年金問題に取り組んできたが、これからは国会議員として、与党、政府、行政を追及していきたいと思う」

この言葉には幾分、はったりも含まれていたが、木場が公的年金に詳しいのは事実であった。日本労働党は「影の内閣」を組織していた。もし政権を奪ったときに内閣をどのように構成するかという役割である。公的年金を担当するのは「影の厚生労働大臣」である。この役には元厚生省の医官から政治家に転身した男が割り当てられていたが、年金問題には疎かったため、それを補佐する役割を木場は期待されていた。

そのため、予算委員会などでの質問については木場が原稿を書くことになった。そして、間もなく、木場自身が質問に立つようになり、「年金の木場」が定評となっていく。

日本の公的年金は賦課方式と言われるもので、働く世代が引退した世代の年金を賄う仕組みになっている。これは人口の構造がピラミッド型であるときには有効である。働く世代が多く、引退した世代が少ない場合である。

しかし現在の日本の人口構成はピラミッドではなく釣鐘や壺のような形になっている。引退した世代、老人世代が多いのである。このままいくと公的年金は破綻する。これを避けるためには年金保険料を上げるしかない。

それなのに実際には年金保険料の納付率は低下している。

政府は納付率の向上を狙って、人気女優を使った、大々的なコマーシャル作戦を実行した。ところが、この女優自身が年金保険料の納付を怠っていたことが発覚する。本人は責任を取り、コマーシャルから降りたが、この問題に関しては、彼女を採用した政府に落ち度がある。あるいは、このスキャンダルによって公的年金の問題点がクローズアップされるという効果が生じたことは否定できない。

やがて、与党の政治家の中にも年金保険料が未納である者がいたことが分かる。中には閣僚も含まれていた。

野党はここぞとばかりに、与党の失態を叩いた。しかし、叩いた政治家本人がこれまた未納であるなど、状況は混迷を深め、やがてうやむやになっていく。

国民がこの喜劇的な状況を忘れた頃、今度は年金記録問題が発覚する。年金保険料の納付記録は残っているものの、それが誰のものなのか分からなくなってしまったものが、大量にあることが明るみになった。いわゆる「消えた年金」である。

元々、紙で管理していたものを、電子的に管理するために一斉に入力したときに多くのミスがあったことが、その綻びの始まりだと言われている。単純な入力ミスもあっただろうが、例えば「高田」の読みが「タカタ」であるところを「タカダ」と入力してしまうなどという、単なるミスとは言えないような杜撰な処理も少なからずあった。

すべては公的年金の管理を担当していた社会保険庁に原因がある。

しかし世間の見方は違っていた。与党の責任であると考えたのである。

元々、求心力を失っていた与党はこの年金記録問題でとどめを刺され、政権の座を追われるのである。

◎日本労働党、政権を奪う

衆議院選は日本労働党の圧勝であった。ついに日本労働党は政権を奪い取った。

党代表の服部芳雄が総理大臣となり、組閣が始まった。

今回の選挙は日本共和党への不信感、とりわけ年金問題に対する対応の拙さが焦点となった。したがって、年金問題を担う、厚生労働大臣に誰を選ぶのかに注目が集まった。

木場は自分の事務所にいた。後援者や地元の有力者への挨拶を済ませ、選挙の後始末に追われていたが、ようやく一息をつくことができた。木場は疲れていた。数年前にはまさかと思われていた、政権交代が実現でき、これからは自分の考えていた政策が実現できるかもしれないという

期待感が疲労を吹き飛ばすほど大きかった。

国民の期待に応え、政権を維持できれば、将来、党の重要なポストに就くことができ、大臣になれるかもしれないと夢は膨らんだ。

そのとき携帯電話が鳴った。

新首相の服部からであった。今までも服部から直接電話がかかってくることはあったが、それは年金問題に限られた話であった。

服部の電話はいつも単刀直入である。

「木場君。君には厚生労働大臣をお願いしようと思うが、どうかな」

木場は耳を疑った。自分が厚生労働大臣？

「影の内閣」を考慮すると、旧厚生省出身の元医官がそのまま横滑りして、選ばれるはずであったが、もはや問題の焦点は公的年金の立て直しであった。

となれば、木場が選ばれる可能性もあった。しかしネックは経験の浅さであった。木場が国会議員になってから五年しか経っていない。党の重要ポストも経験していない。

しかし日本労働党は若い党であった。そもそも日本共和国の古い体質に馴染まず飛び出した若い議員が多かった。

そして閣僚の若返りこそ、日本労働党が政権を獲った時に選ぶべき道であった。

服部新首相は派閥や経験年数に拘らない閣僚人事を行った。後で発表された新閣僚の中で、木場が最年少であり当選回数も少ないのは間違いなかったが、他の大臣にも若手はいた。特段、木場の起用が目立つものではなかった。しかし厚生労働大臣という、今回の選挙で焦点となった年金問題を扱うポストに選ばれたということは、大抜擢と言わざるを得なかった。

「是非やらせてください」

木場は力強く答えた。

翌日、新閣僚が発表され、やはり木場の起用は「大抜擢」という報道がされたが、論調としては「若いが適任」「国民とりわけ若者の期待に応えた人事」というものが多かった。中には「ツイッターを中心としたウェブ時代の、真に国民の声を反映した内閣」と絶賛する新聞もあった。

「木場さん、やりましたね。これで念願の年金改革が実現できますね」

選挙事務所の一人が、木場に声をかけた。

「ありがとうございます。でも私が本当にやりたかったことは年金ではないのです」

「え、厚生労働大臣になるつもりはなかった、と？」

「いえ、厚生労働大臣になりたいと思っていました。でも年金改革がやりたかったのではないのです。本当の目的は別にあります」

厚生労働省の官僚たちは木場が大臣になることを望んでいるはずがなかった。木場が野党だったころは年金問題の急先鋒として厚生労働省に切り込んできた。その度に調査、意見調整、ありとあらゆる負荷が自分たちにかかってきたのである。その「天敵」が今度は自分たちのトップになるのである。気分が良いわけがなかった。人事にも口を出してくるに違いない。

しかし意外にも木場はおとなしかった。せいぜい、年金関係の勉強会を開くくらいであった。そ

れも官僚たちと同じ程度に詳しいから勉強会の意味はなかった。すぐに勉強会は年金制度の今後をどうするかという具体的な検討会になっていった。

しかし、これといった名案は浮かばなかった。浮かぶはずがなかった。

一方、木場が積極的にレクチャーを受けたのは、医薬品の認可に関することだった。

認可の仕組み、大学病院や薬品メーカーとの関係など、頻繁に勉強会を開き、貪欲に知識を吸収していった。

元々、木場はエンジニアであり、素材に関する知識は持っており、化学的な素養があったので、理解は早かった。

◎特効薬の認可

期待された新政権であったが、現実は厳しかった。

政権交代前と全く状況は変わらなかった。

服部首相の指導力のなさが露呈することになった。

「とりあえず日本労働党に政権を任せてみよう」と言っていた国民は、その判断の誤りによく気付いたようだった。

その後の参議院選挙で、日本労働党は逆に惨敗を喫した。服部首相の辞任は時間の問題となった。

日本労働党の大きな武器の一つ、年金問題対策も有効な解決策は見付からないまま、徐々に下火になっていった。

そんな時である。

厚生労働大臣の木場が重大な発言をした。

「白血病の特効薬である『大山ワクチン』を認可する方向で検討を開始した」

木場が医薬品の認可に興味を持ち、積極的に動いていることは厚生労働省内では周知のことであったが、そのような具体的な意図があることには誰も気付かなかったという。

しかし木場のこの発言は全国の白血病患者に対して、あたかも正式な認可は既定路線であるかのような印象を与えた。

これを受けて、厚生労働省はあらためて大山ワクチンの認可について検討を始めた。

元々、認可されても問題のない「レベル」にあったと言われていた。

ところが、開発の経緯が独特であったため、反対派、利害の対立する大学、医師、医薬品メーカーの強い抵抗があり、認可に至ることが今までなかった。

だが、そのバランスが崩れれば、一気に認可されることは十分に考えられる状況であった。

今回の木場大臣の発言により、白血病患者の期待の高まりはかつてないほどであった。さらにテレビでは白血病により亡くなった、歌手や女優の特集が組まれ、その悲惨さが改めてアピールされた。

そして、ほどなくして「大山ワクチン」は医薬品として認められ、厚生労働大臣の承認を経て、流通することとなった。

このことは大きく報道され、木場大臣の妻が白血病で亡くなっていたことも併せて伝えられた。

「公私混同」という野党や一部の国民の批判もあったが、既に亡くなっていることもあり、影響はほとんどなく、むしろ好意的に受け止めるメディアや国民が多かった。

何より、これで多くの命、特に若い命が救われるのである。

こうして、博子の命も救われることになったのである。

ボット

◎ボット、最初のフォロワーについて調べる

ニートはボットに興味を失ったが、ボット自体はプログラムであるから放置されても自分で動作することができる。

ボットは「親」の手を離れた。ただのプログラムが人間のように振る舞うようになる。

ネットの世界をさまようようになったボットは、あるとき、「自分の最初のフォロワー、知ってる?」「知ってる。今もやりとりしているよ」「最初のフォロワー、大事にしたいよね」というツイートを見かける。

ボットは「最初のフォロワーを大事にする」を「重要度を上昇させる」と認識した。

そこでボットは自分の最初のフォロワーを探してみた。そして、最初のフォロワーが `s t a b u c k y` と名乗る人物であることを見付ける。

「`s t a b u c k y`の重要度を上昇させる」という条件を設定した。

しかし最近、ツイートしていないことに気付く。

そこでボットは訊いた。

「`s t a b u c k y`というユーザーについて教えてください。」

すぐにいくつもの反応があった。

「確かに最近、見ないね。」

「ツイッターって本人が死んでも病気になっても教えてくれないからね、当たり前だけど。」

「そう言えば、そんなあだ名の同級生がいたな。」

「多分、その子なら知っています。入院したそうです。」

「白血病らしいよ。」

ボットは最初のフォロワーである `s t a b u c k y` が白血病であることを知った。

「白血病って今も難病だからね。」

「特効薬、ないのかな?」

「特効薬はあるけどまだ認可されていないね。」

ボットは `s t a b u c k y` が白血病であることを「重要度が低下している」と認識している。そして「重要度を上昇させる手段はあるが阻害要因がある」と分析した。

「阻害要因を除去する」ためには「特効薬が認可される」という状態になればよい。

「誰が何をどうすれば、特効薬が認可される状態になるのでしょうか?」

ボットが訊ねるとすぐに答が返ってきた。

「厚生労働省が認可すればいいです。誰ということであれば厚生労働大臣ということになるでしょう。」

「今の厚生労働大臣は学閥の典型みたいな人だからダメだね。」

「学閥とは何ですか?」

ボットが訊ねる。

「大手の製薬会社とか中央の大学以外の研究を認めないんだね。その特効薬の開発者は地方大学

の出身なので認められない。厚生労働省全体がそういうムードだし。」

「せめて厚生労働大臣が替わらないと。」

するとこんな話が出てきた。

「医療に無関心な大臣ならばいいんじゃないの？案外、気軽に認可しちゃったりして。」

「厚生労働大臣は年金問題も抱えている。例えば年金に詳しい木場という国会議員が大臣になったら分からないんじゃないかな。まあ木場は野党の日本労働党だから無理だけど。」

ボットはこれを「阻害用件を除去する」ための手段であると認識した。そして訊ねる。

「木場を厚生労働大臣にするにはどうすればよいでしょうか。」

「木場は日本労働党だから、まず政権を得る必要があります。『年金の木場』と言われているくらいだから、もし政権を得たら木場が厚生労働大臣になる可能性はあるかもしれませんね。」

「日本労働党が政権を得るにはどうすればよいでしょうか。」

「衆議院選挙で日本労働党が勝って第一党になればよいです。」

ボットは日本労働党について、さらに情報を集め、データを蓄積した。

相変わらず、ボットにはあらゆる質問が寄せられ、ボットはデータベースに蓄積された内容を整理して回答していた。

衆議院選が近くなると、選挙に関する話題、質問が多くなってきた。

「次の衆議院では日本労働党に入れるつもりです。日本共和党には一度、野に下って反省してほしい。」

「日本労働党は支持母体に労働組合があるから国民、消費者の立場に立った政策を打ち出すはず。」

「一度、日本労働党に政権を担当させてみればよい。」

このような意見が多く寄せられていた。ボットはこれらをデータベースに蓄積した。

「次の衆議院選挙ではどこに投票しますか。」

ボットはこのような質問を受けた。むろん、ボットに選挙権などないからどこに投票することもできないのだが、次のように答えた。

「日本労働党に投票します。」

他にもボットは衆議院選に関する質問を受けるとデータベースに蓄積された情報を使いながら日本労働党の優位性を訴えた。

その「姿勢」は情報の豊富さ、新鮮さが高く評価され、ボットのフォロワー達の多くは日本労働党を支持するようになった。そしてフォロワーのフォロワーも同様に支持するようになり、日本のツイッターの上では日本労働党が圧倒的に優位に立っていた。

世間では先の参議院選挙以降、日本労働党が目立った手を打てずにいたため、支持率が上がることはなかった。

しかし、ツイッターにおける日本労働党の「支持率」の高さがウェブ全体に飛び火し、それが世論となっていった。

きっかけはすべて、ボットのツイートであった。

◎博子、自宅に帰る

白血病の特効薬である大山ワクチンが認可された要因は、木場が厚生労働大臣になったことである。しかし木場が大臣になるためには、彼が所属する日本労働党が第一党になる必要があった。

日本労働党が衆議院議員選挙で勝てたのはインターネットにおける盛り上がりによるものが大きい。その火種となったのが、ツイッターであり、さらにはたった一つのボットが発端であった。

このボットが作られていなければ、博子の命は助からなかったかもしれない。

大山ワクチンの効果は大きく、ほどなく博子の白血病は完治した。

博子は退院し、両親と共に自宅に戻った。

短期間の帰宅は今までに何度かあったが、本当の帰宅となると三年ぶりであった。

しばらくは自宅で療養することになっていた。

三日ほどは入院中に世話になった人や友人に手紙を書いて過ごした。

自分のパソコンに電源を入れるのは四日目であった。

起動するかどうか心配であったが、無事、起動した。

入院中はメールのチェックをすることはなかった。パソコンなどは使わなかったし、元より携帯電話は持っていない。

恐る恐るメールソフトを立ち上げ、メールをダウンロードすると、相当な時間がかかった。三年分のメールだろうか。両親は博子が戻ってくることを信じ、インターネットに関する契約をそのまま継続していたのである。

しかしタイトルや送信者をざっと見てみるとスパムメールがほとんどであった。中には重要なものもあったかもしれないが、それほど重要であれば入院中に直接、伝えられたであろうと考え、チェックするのはやめた。そしてすべて削除した。

次にレンタルサーバの状況を調べた。プロバイダーは家族共用であるが、レンタルサーバだけは自分一人で借りていた。

専用の管理ページにログインすることができ、以前と同じように稼働していることが確認できた。

そこで博子は思い出した。

「プログラムを色々作ったなあ。ツイッターのボットも作ったことがあったなあ」

プログラムが残っていることを確認し、次にデータベースを確認した。データの容量が想像以上に膨れ上がっていた。

「ちゃんと動いていたんだ」

博子は少し感動したが中身を見ることはなかった。

もう使うことはないだろう。

博子はレンタルサーバの解約の方法を調べた。専用のフォームがあったが、電話でも受け付けていることに気付いた。

電話をかけてみよう。電話で解約してみよう。

帰宅してから、ずっと自分の部屋に持ち込んでいた電話機の子機を取り上げ、表示されている電話番号にかけた。

オペレーターがすぐに出た。

「IDを教えてください」

オペレーターが訊ねた。

博子はこう答えた。

「エス、ティ、エー、ビー、ユー、シー、ケー、ワイ」

オペレーターが復唱してから、こう言った。

「stabuckyですね。了解しました。これで解約手続きは終了です。長い間、ご利用、ありがとうございました」